

長引くせき—— 今年は「百日咳」が増えています

日野病院 病院長 孝田 雅彦

日野病院の孝田雅彦病院長が、さまざまな病気や健康について、その予防法や健康に過ごすための豆知識などお役立ち情報をお届けします。



皆さんは百日咳という病名を聞いたことがありますか。ほとんどの人は知っているけど見たことないと言われるのではないのでしょうか。今年は日本全国鳥取県も含めて百日咳が増加しています。全国的には全数届け出を開始した2018年からは最も多く、鳥取県でも前年数をすでに上回っています。

そこで、百日咳について最近の情報を含めて勉強しましょう。

増加している「百日咳」 どのような病気か

百日咳は名前からして「咳がひどそう」と想像がきます。その通り、江戸時代から百日咳の名前は知られており、百日も咳が続く病気とされています。百日咳の医学名 *Pertussis* もラテン語で激しい咳という意味です。

百日咳は百日咳菌が飛沫感染あるいは接触感染で体内に入って7〜10日ぐらいで発症します。発症する1、2日前から感染力があります。

初めは鼻水や軽い咳など風邪そっくりの症状から始まるため、本人も周囲も気づきにくいのですが、この時期からすでに人にうつしやすい点が厄介です。感染力はインフルエンザの数倍、新型コロナウイルスよりも強く、はしかと同等で最強です。

初期症状は2週間程度続いた後、痙咳期となり、コンコンコン、ヒューといった特徴的な咳が6週間以上持続します。発熱はあっても軽く、出ないことも珍しくありません。

治療は抗生物質（マクロライド系薬）を5〜7日間内服するのが基本ですが、最近は耐性菌も増えているので医師に十分診察をしてもらってください。また、適切な抗菌薬治療を開始

して5日が経過すると、人にうつす力は大きく下がるとされています。

治療しない場合は、咳が始めてから3週間ほどは感染性が持続します。学校・職場・医療現場でも、この目安が復帰可否の判断に用いられます。特にワクチン未接種の乳児に感染させないように気をつける必要があります。

百日咳にかからないための 必要な知識・予防とは

予防の中心はワクチンです。乳幼児には5種混合ワクチンの定期接種（生後2か月から合計4回接種）が行われており、予防効果は90%、重症化もほとんどありません。しかし、5年程

度で効果は顕著に減少するため、小学校高学年での追加接種が推奨されています。

一方、成人、高齢者に対するワクチンの推奨はありません。ただし、米国では10年ごとのワクチン接種が推奨されています。

喘息、慢性閉塞性肺疾患、肥満は百日咳重症化のリスク因子です。このような持病のある方は日頃から、感染予防に注意してください。日常的には飛沫感染対策としてマスク、手指消毒、手洗いが有効です。

今年も全国でも、そして鳥取県でも百日咳が増えています。正しい知識と、いつもの予防をていねいに行い、いちばん弱い立場の赤ちゃんを守りましょう。

